

津久見港

大分県土木建築部港湾課

〒870-8501 大分市大手町3-1-1

☎097-536-1111(代)

URL : <http://www.pref.oita.jp/17300/index.html>



1. 概況

津久見港は、県南リアス式海岸線により形成された津久見湾の湾奥に位置し、東は豊後水道を経て愛媛県の南西部海岸、佐田岬より宇和島港に至る海岸線に相對しており、地形、水深にめぐまれた天然の良港として、往時より内海交通の要衝として繁栄してきた。

港の北部は臼杵湾と津久見湾を分離する突出海岸線の半島となり、西部は本港取り扱ひ貨物の大半を占める石灰石資源の供給地である。石灰岩山塊が広がり、港湾施設の大半はこの地区に所在している。東側は漁船等の泊地として利用され、大部分は道路護岸または自然水際地である。また、青江川、津久見川等五河川が港湾内に流入しているが、いずれも小河川で港内水深の急変は見られない。

本港にひかえる津久見市は、人口17,969人(平成27年現在)で、日本有数の生産量を誇る石灰石を原料としたセメント工業を基幹産業としている。一方、リアス式海岸特有の傾斜地を利用した津久見みかんは、その質、量とも古くから知られている。

津久見港は、遠く江戸時代に石灰焼きに始まり、明治後期わが国にセメント工業・製鉄工業ならびにソーダ工業が開発されるにおよんで石灰石需要は急増し、これとともに港湾は著しい伸長を來たした。大正5年、国鉄日豊本線の開通後、石灰石と良港に着目して、この地にセメント企業の開始を見るに至った。

その後、昭和3年税関の設置、昭和9年内務省指定港湾編入とともに津久見港港湾施設の整備必要性が痛感され、修築工事の議が起こった。これにともない昭和13年計画立案のち昭和15年より修築工事に着手した。また、昭和13年小野田セメント津久見工場の発足により、津久見港は石灰石はもとより、セメントの積出港として名実共に鉱工業港として発展の端を開いたわけである。

戦後、昭和23年運輸省によって本県唯一の産業整備港として整備が進められ、昭和26年には-9m岸壁1バースが完成し、1万トン級の船舶の接岸も可能となった。また、この間昭和24年9月東九州唯一の開港に指定され、ヨーロッパ各国および東南アジア諸国との交易はいよいよ盛んとなり、昭和26年12月重要港湾指定および昭和27年の指定保税地域指定を経て、港勢は急速な発展を遂げ現在に至っている。現在、大型けい船岸施設の大半は企業の専用岸壁等で占められてお

り、全延長2,745m、計26バースとなっている。

また、津久見港は、リアス式海岸に面した急峻な地形のため、都市機能を拡充していくための用地の確保が課題であり、青江地区で進められてきた再開発は、港湾機能を拡充するとともに、その背後を埋立て都市機能用地等として利用されている。

さらに、津久見港においては、堀地と港湾の距離が非常に近接している優位性等から、セメント内でも高い競争力を有し、今後とも安定した生産活動が営まれるものと考えられるため、物流機能の拡充や石灰石鉱山からの発生土の処分地の確保など、これらの基幹産業を支える工業港としての機能をさらに充実させていく必要がある。

このため、本港の主力貨物である砂利・砂・石材や石灰等を適正かつ効率的に取扱うため、平成30年に、堅浦地区に-7.5m岸壁1バースが供用開始した。